

『国際協力のひとこま』 ⑤

★事業事例紹介／

(生活改善アプローチによる) 持続的農村開発のための普及員育成研修コース：JICA 筑波から受託 (2023年1月から2月；事後プログラム実施)

ー【副題】受益者主体の学びとは その1ー

事務局サイドでは、受託事業と異なる法人経営と言う視点で物を見ていることもあり、以下のような内容をお知らせさせていただきます。内容は、少々、理屈っぽい記載かも知れませんが、お許しいただければと思います。

さて、前々回、第2号(2月24日掲載)でご紹介させていただいた生活改善アプローチコースの概要に引き続いてのご紹介となります。

当該イシューでのフィロソフィーに内包される重要な点は、具体的に、研修員がコースから学び取ったことをヒントとして、自国で応用するという点かと思ひ(素人目に)ます。研修員である技術普及を行う彼らの職場で何をどのように生かせるかは、普及員(研修員)それぞれの国、地域、或いは対峙する地域の住民によって、異なるはずです。(学んだこと、日本の実践例は、当たり前ですが、そのままは各途上国に転用出来ません。)つまりは、教わったことをストレートに導入するのではなく、考え方や取り組み手法に内包されるフィロソフィーを応用出来て意味があると思ひます。そうは言っても、『応用出来るよう』、学ぶということは、容易いものではありません。

さて、学びを咀嚼し、さらに応用すること自身は、後程ご説明いたしますが、あなたが若い時分、学生(生徒)であった時、授業を受け、いろいろ学習を進め、必死になって記憶し、様々な問題に対する解き方を記憶しようと奮闘するものの、試験を目の前にすると、うまく回答が導き出せない、より良い成績を上げられないという嫌な思いをしたことはありませんでしょうか？

授業で聞いて記憶し、学んだと思ひ込んでいたのではないのでしょうか？記憶したことは、意外と短期間で、忘れることの方が多いと言われます。

それを避けるべく復習をし、自身の記憶をいつでもたどれる様、学び方の工夫した方であつては、前述のような思いより、少しばかり、試験時でも、記憶と言う引き出しから正解を思い出せたかもしれません。

ですが、もっと効果的な学びとするには、復習を幾度も繰り返し、頭の中でそのことをリフレインするのも良し、さらには、声に出してみる、筆記してみる(つまりは身体の脳以外の五感を生かす)、動きを取り入れると記憶から消える率、或いは記憶している期間に大きなプラスがあると言われていす。

少々、理屈っぽい書き出しで恐縮ですが、本研修コースでは、多くの講師を務めていただく有識者の方々のほぼ全員が、それぞれのご経験は違いこそすれども、共通して気づかせてくれる言葉に、「教壇に立つ立場、或いは似たような立場で、一方的に知識、情報や技能だけを一方的に教える教員や指導者になってはならない」と一貫して、研修中に言われています。

覚えさせることなく、学ぶ側の者が、どのように考えれば、より良い道を選べるのか、正解が一つとは限らない問題に直面した際どうすべきか、或いは正解を導くためのいくつかの道筋

すら見つからない、壁にぶつかった時に、今まで考えてきた見方とは違う側面から考えてみることで、新しい解決法を得られることがあると言われます。逆に、〇〇で良いと思いつつも、失敗してしまうことで、失敗から異なる見方による正解を得る（Try & Error）ことが出来ることもあるでしょう。



生活改善アプローチを学んだ研修員は、『農民たちそれぞれ自主性を重んじ、彼ら自身が自ら考える、感じる様に、側面からそれとなくその人の気持ちに共感し、彼ら農民たちの思いを話させてあげ、農民本人の意欲、やる気を引き起こすこと』との気づきを自ら（研修員であったり、対面する農民であったり）のものとなるよう、伝えていきます。

（その実践後の成果は次回掲載までお待ちください。）

以上

（文責・事務局 浅野）

#生活改善 #セイカイ #農村開発 #自ら考える